

京都大学	博士（地域研究）	氏名	波佐間 逸博
論文題目	北東ウガンダ東ナイロート社会における牧畜家畜と人間の共生的関係に関する研究		
（論文内容の要旨） 本申請論文は、ウガンダ北東部の東ナイロート社会における牧民と家畜の関係に焦点をあてて、放牧の生態学、動物社会学、人類学、民族音楽学などの見地から、家畜と人間の相互的な認知と行動を、両者の共生的関係として記述・分析した研究である。 第1章「序論」では、調査対象となるカリモジョンードス社会における家畜と人間の相互関係を記述するための理論的な立場が明らかにされている。自然と文化を二項対立的に見る姿勢を批判的に考察し、家畜と人間の関係を相互反照的なものとして分析するための理論的基礎が提示されている。 第2章「カラモジャの概要」では、自然環境や言語、居住様式や生業、野生植物利用の特徴、社会構造、個人の成長にともなう出来事などに焦点をあてながら、調査地域の概要が記述されている。 第3章「家畜の性・成長段階と繁殖」では、牧民が家畜に対して、放牧、搾乳、去勢などの生殖管理、出産の介助などの関与をおこなうときには、家畜の性と成長段階の違いに細心の注意をはらっていることが明らかにされ、牧民による家畜の詳細な分類は、そうした具体的な関与方法と密接に関連していることが示されている。 第4章「体色と人為的標徴」では、牧民が家畜の色や模様、身体部位の特徴などに注目して、家畜を一頭ずつ精緻に認識していること、また、家畜の焼印、耳型の加工、角の矯正といった関与によって、所有者の帰属父系集団や武勲の刻印や身体装飾をおこなっていることが記述されている。 第5章「家畜と人間の言語的・非言語的なコミュニケーション」では、搾乳や子家畜の保護、放牧への同行などのときにみられる家畜と牧民との身体的な接触や近接関係を記述することによって、家畜が自分の名前を呼ばれることや牧民の身振りに対して的確に応答していることが明らかにされ、家畜と牧民のあいだに言語的・非言語的なコミュニケーションが成立していることが示されている。 第6章「放牧の成立機構」では、家畜の日帰り放牧の単位となる群れを構成する家畜が、夜間には同じ囲いのなかで近接し、日中は同じ放牧ルートを共有することを反復することをとおして、自己と同じ群れの個体とそれ以外の個体とを識別し、その認知にもとづいて放牧中に自律的に集合することが明らかにされている。 第7章「牧歌からみた個としての家畜」では、男性が特定の家畜個体について作詞・作曲する歌が記述・分析されている。その歌詞には、作者自身が参与したレイディングや家畜の贈与、放牧など、特定の家畜個体にまつわる出来事が描写されている。すなわちこの歌には、牧民が友人や親族などとともに、歌の対象となる家畜個体と具体			

的ななかかわりをもった「歴史」が表現されており、牧民が特定個体の独自性を感受することには、こうした記憶が密接に関連していることが論じられている

第8章「レイディングを介した集団間関係」では、レイディングの対象となる隣接集団はしばしば「敵」として表象されるが、「敵」とのあいだに集合的・全面的な対決はおこらず、レイディングは「敵」の殲滅を目指すものではないこと、また、「敵」であるはずの隣接集団のメンバーとのあいだにも、空間的な近接や共住の経験をとおして個人的な同盟関係が形成・維持されていることが明らかにされている。

第9章「結論」では、第2章から第8章までの記述と分析を整理し、以下の二点に関する考察がおこなわれている。第一に、カリモジョンードス社会においては、牧民が家畜の生理・生態や行動を熟知しているだけではなく、家畜の側もまた、牧民への近接や接触をもとめ、牧民を優位者・保護者として認知し受容している。この社会における家畜と人間のあいだの共生的な関係は、両者の相互的な認知にもとづく相互反照的な関係として成立していることが明らかにされている。第二に、東ナイロート社会における「他者」に対する態度の特質を検討し、「個」として直接的・対面的な相互行為をおこなうことを通じて意思決定にいたるという「個人主義」の傾向が存在することが指摘されている。

(論文審査の結果の要旨)

東アフリカの乾燥地域には、家畜に依存して生活する牧畜社会がひろがっている。家畜は人びとに食糧を提供するだけではなく、誕生や成人、結婚などの人生の重要な節目に贈与・交換されたり、病気などの不幸に対処するために供犠されるなど、社会的・宗教的にも大切な役割をになってきた。しかしながら従来の研究は、人間が家畜をどのように利用しているのかに焦点をあてたものが多く、人間が家畜とのあいだにいかなる関係を築いているのかをミクロに記述・分析する具体的な研究は、あまりおこなわれてこなかった。

本論文は、北東ウガンダのカリモジョンおよびドドス社会で実施したフィールドワークにもとづいて、社会のなかで主要な位置を占めている家畜と人間の相互関係について、家畜の認識・分類とケア、家畜と人間のコミュニケーション、放牧の成立機構、家畜を主題とした歌、そして家畜の略奪に焦点をあてて、詳細な記述と分析をおこなった研究の成果である。

本論文は、以下の三つの学術的な貢献によって高く評価することができる。

第一は、家畜と人間の関係を分析するにあたり、両者の「相互反照的な関係」という理論的な視座を明確に構築したことである。申請者はまず、自然と人間の関係を二元論的に把握する認識論を批判する文献を整理・分析し、そのうえで、人間が経済合理性にもとづいて家畜を一方的に管理・支配しているという考えかたに対して、実証的かつ多面的な資料を駆使して反論している。申請者のいう「相互反照的な関係」とは以下の状態をさす。牧民は、一頭一頭の家畜に対して詳細な知識をもち密接な働きかけをするだけではなく、家畜は個々人の「歴史」としての記憶を表現し、それを保持するための媒体となっている。他方で家畜の側もまた、受動的に管理されるのではなく、牧民への近接や接触をもとめ、相互のコミュニケーションを達成し、そして牧民を優位者・保護者として認知し受容している。このように家畜と人間は相互学習をつうじて共生関係を構築しているのだが、それを両者の「相互反照的な関係」として論ずる視座を確立した功績は大きい。

本論文の第二の貢献は、牧民が実践する家畜のケア（出産介助と母子関係の確立、搾乳、交尾の介助や去勢など）、家畜分類と個体識別、固有名の付与、日帰り放牧、家畜と人間のあいだの言語的・非言語的なコミュニケーション、身体的な接触や近接関係などに焦点をあてて、家畜と人間のあいだの相互認知と、それにもとづく相互の働きかけに関する綿密な記述を、動物行動学や動物社会学、民族生物学、文化人類学の手法を駆使して提示したことである。本論文が、家畜と人間の「相互反照的な関係」という視座のもとに両者の相互関係を多面的・包括的に描き出したことは非常に重要な貢献である。

東アフリカの多くの牧畜社会では、男性が特定の去勢オスを選択して、その個体とのあいだに独特の親密な関係を築いている。男性がその個体についての歌を作詞・作

曲することも、この現象の重要な要素のひとつであるが、本論文の第三の貢献は、この歌（計 754 曲）の内容を緻密に記述・分析したところにある。その歌詞には、作者自身が参与したレイディング、家畜の贈与や放牧といったように、その歌の焦点となる家畜個体にまつわる出来事が描写されており、人びとは、いつ、どこで、誰がなにをしたのかを、この特定個体の存在とともに記憶している。すなわちこの歌には、牧民が親族や友人とともに、歌の対象となる家畜個体と具体的ななかかわりをもった「歴史」が表現されている。この実態を解明したことは高い評価に値する。

以上のように本論文は、調査対象社会における家畜と人間の共生的な関係を多面的・総合的に解明した、非常に優れた業績である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 25 年 1 月 18 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。